

三学期と新学期の間で思うこと

中谷喜久子

からやかで美しい青春の輝きのイメージとして目の前に表れたことは見つめる。幾度も見つめる。「とまどい」「まよい」「ためらい」「なやみ」——久しく考えたことも感じたこともなかったようなことばであった。私にもこのような、やさしく美しい輝きがあるのではないか、否あるはず、否あってほしいと思ったことがいかにも軽率だったと後悔と共にはずかしく思う今である。

保育経験年数が年齢の半分をなろうとしている私にとって、「とまどう」たり「悩ん」だりすることは保育

のあの事とか、この事とか言える部分のことではなく、もっと生活のすべてに染みこんでいるもの、いかえれば私の中に沈澱していて、その重みによって私自身の生きる力の平衡がかるうじて保たれているようなもの、と言うことができる。

時には何かのきっかけで沈澱していたものが塊となって浮んでくることもある。かき回されてコロイド状になったりもする。そして粒子は増えはするが減りはしない。粒子を取り出して仔細に眺めると、それはあまりにも取柄のない平凡な一つ一つなのである。悩み

や感いは小さく平凡であつても塊となると私をゆさぶる強い力・大きな要因となるのである。大ゆれに揺れる私は、「幼稚園やめよう」と思つたり、「子供のそばにべつたりと居る母親になろう」とか決心する。そのように決心したくなる時がこの嵐のまっ最中ということである。一つ一つの悩みや感いは本当にささやかな日常茶飯事なことなのだが……。

群がる敵どもを右に左に投げとばし? 「せんせいつよいなア」と羨望のまなざしを向けられたものだったのに。この頃はどうかろう「おすもうね」(ウーム一対一ならんとか)「

「チ・リ・リ・リ!」と聞えた時にはもう受話器の方へ向つていたものだったのに。「あら おでんわと思ふ時にはもう入口近くの先生がツツと立ってドアの向うへ消えておられる。(ムムムこの頃すい分耳と頭と足の連絡が鈍くなったこと。それにしては口のよく動くこと。)

「せんせい おはしママがわすれたの、かしてください。」(ママはお仕事でお忙しいのよきつと。ママのせいにしてはだめ)「はい どうぞ。おすきなお箸選

んでね。きょうお家へ帰つておあそびする前にひとりでショルダーバックにお箸箱入れるの あなたも忘れないようにしましうね。」

我家で、「おかあさん、ベーハンキューウシヨクだったのに僕おはし持つていくの忘れたんだよ」「あらまた? 月・木は米飯給食の日なのに」(尤も母親もすっかり忘れていたのだが)小五の息子は時々友人から借りたり先生からおごと覚悟でお借りしたり色々苦心しているようである。時には家の傘を三本まとめて学校から持帰ったりする彼である。

「おかあさん 参観に来なかつたでしょ。わたしいつしょうけんめいに大きな声で読んだのよ。お習字もちゃんとはつてあるのに。」と小二の娘。「ごめんなさいね、卒園式の準備でどうしても都合がつかなかつたのよ。」

若い頃に、よい保育よい指導をしておられる年輩の先生にお会いする度に、私も早く確固たる信念を持ち、余裕のある保育が出来る、いつでも喜んで遊べる先生になりたいと思つたものだった。ところが、主人の協力や、実家に近い等好条件に恵まれて、職場の若

い先生に支えられて今まで仕事を続けられてきている現在、経験年数が多いということと真に子供達にとって良い保育者であるということは別問題であることが痛いほどにわかるのである。困っていることや悩んでいることを問われれば即座に、保育のあの事この事、あの子のことこの子のこととストレートに取出せた時代もあった。が今はどうだろう。体力の衰えを思ったり、なんとなく理解したつもりで子ども達を見ている我身を戒めたり、自分の子供のしつけや教育の至らなさに後悔や不安を感じたり、主任としての自分の在り方に限界を思ったり、さまざまな感情が錯綜している自分が保育者として子供達の前に立っていることにむしろ恐れと不安を覚えるのである。胸を張り頭をまっすぐ上げて闊歩する姿と、周囲を眺めながら背をまるく自信なさそうに歩く姿にたとえることができる。若くはない自分〃今まさに中年に突入しようとしている私は、健康のこと、仕事のこと、職場のこと、家庭のこと、子供の教育のことの渦の中で葛藤しているのである。

四月六日復活祭の日に私は本当に励ましと忠告の言

葉をいただいた。「そこで高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである」(コリント人への第二の手紙十二・七節)

悩んだり、行きづまったり途方に暮れたりする頼りない弱い存在の私が保育者として在ることを赦されていることに感謝する。

(青森・八戸小中野幼稚園)

